

Title	ミストラルとプロヴァンス語
Author(s)	畠中, 敏郎
Citation	大阪外国語大学学報. 1 p.71-p.82
Issue Date	1952-05-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80086
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ミストラルとプロヴァンス語

畠 中 敏 郎

MISTRAL ET LA LANGUE PROVENÇALE

par HATAKÉNAKA Toshio

R é s u m é

Alphonse Daudet compare la restauration de la langue provençale par Mistral à la reconstruction d'un beau palais par un fils de paysan. Seulement, cette grande entreprise ne fut pas achevée par un seul écrivain. Historiquement, les mouvements littéraires en provençal continuaient avant lui dans le Midi et la nature provençale était assez fertile pour y faire germer le grain du félibrige.

Le vrai organisateur du félibrige fut Roumanille. Plus qualifié que lui, Mistral lui succéda pour être le chef du nouveau mouvement mais on doit bien admettre le concours de tous les félibres dans ses activités ultérieures.

Des trois buts que Mistral se proposa, l'essentiel était la restauration du provençal. Voici pourquoi. 1° : On saisit l'esprit par les langues et les lettres plus précisément et d'une façon plus continue que par les autres moyens.

2° : Les Français estiment la conversation et les Provençaux s'enivrent de leur parler et en enivrent les autres. Pour ceux-ci, l'effet de la langue est absolu.

3° : L'emploi du provençal était nécessaire pour résister à la centralisation fade et insipide des Méridionaux. 4° : Les félibres ont d'abord fait appel à leurs compatriotes. En provençal, ils pourraient mieux exprimer les sentiments de leur terroir et provoquer une grande sympathie parmi les Provençaux. 5° : Quant

aux félibres, le provençal était plus musical, plus littéraire que le français.

On a appelé le félibrige une réaction sans lendemain. L'unification des langues d'oc a été assez loin d'être réalisée parfaitement. Le succès de "Mireille" doit beaucoup aux éloges de Lamartine et à l'opéra francisé de Gounod. Le langage de Maillane-Avignon était difficilement compris des autres Méridionaux. Les Français du Nord n'ont guère lu les oeuvres littéraires écrites en "patois".

Mais Mistral n'était pas un simple exalté sans réflexion. D'abord, toutes les grandes oeuvres artistiques sont naturellement difficiles à goûter pour ceux qui n'ont pas de connaissances suffisantes. Et il est vrai que les paysans et les bergers n'ont pas beaucoup lu ses livres mais il est aussi vrai qu'eux et les intellectuels du Midi se sont passionnés en entendant ses poésies. Ses oeuvres n'ont pas été un jeu de cabinet de travail.

Cette restauration de la langue provençale stimula les autres régions de France et des mouvements naquirent pour acquérir les droits régionaux. Paris ne put s'empêcher d'y prêter l'oreille. Maintenant "la France est un Etat fortement centralisé, en voie de décentralisation" et on ne pourrait nier la contribution du félibrige à ce penchant.

Mais le régionalisme français a ses limites et n'arrive pas au séparatisme absolu. Les félibres, sauf quelques extrémistes, ont servi la France tout en faisant ressortir les caractères spéciaux de leur terroir.

La littérature provençale a été bien accueillie dans beaucoup de pays étrangers (les pays de langues latines en particulier) où le français et le provençal sont à égale valeur comme langues étrangères. Cette littérature continuera à être estimée. Le fait que Mistral fut lauréat du Prix Nobel prouve bien l'estimation du félibrige à l'étranger.

Mistral dirigea un mouvement réactionnaire, antitèse qui aboutirait à une synthèse. Même si le félibrige a perdu tous ses autres droits, il a celui d'être une bonne littérature régionale même aujourd'hui. Et si le travail des félibres s'est entièrement terminé, leurs oeuvres valent la peine d'être étudiées.

On rapporte que, dans les universités du Midi de la France, les études des langues et littératures régionales sont très actives depuis plus de dix ans. Qui pourrait dire que ce soit un phénomène purement rétrospectif et douter que cela résultât, sinon totalement, du mouvement félibréen ?

フランス文學にいささかでも親んだ人なら誰でも知つてゐるアルフォンス・ドーデーの短篇集「風車小屋だより」に、その中では比較的人の注意を惹かない「詩人ミストラル」の一篇がある。まだ若いドーデーが、南佛プロヴァンスの、作者のいはゆる「風車小屋」滞在中のある日、かねて親しい、先輩にあたるプロヴァンス語の詩人ミストラル(Mistral)を、その住む Maillane の村に訪ねる。詩人は新作の長篇叙事詩 Calenda に最後の推敲を加へてゐるところ。折からの村の祭を背景に、彼はドーデーに促されて、その一節を、「音楽的な、おだやかな聲で」読みはじめる。「かつては王妃たちの口に語られた言葉、今はこの土地の羊飼しか解せぬ言葉、四分の三以上もラテン語そのままの、この美しいプロヴァンス語で、ミストラルがその詩を誦してくれる間、私は内心この人を讃嘆してゐた。さうして、彼が生まれた時この祖國の言葉が廢墟の状態にあつたこと、彼がその廢墟をどのやうに建てなほしたかといふことを思ひあはせ、今もなほアルピュー山中に見られる、あのレ・ボーの王族の古御所のさまを心に描いてゐた。」その莊麗の宮殿は今は見るかげもない廢址と變り、家畜は生ひしげる草の中に餌をあさつてゐる。しかしあ

る日、一人の農夫の息子がこの冒瀆のさまに憤り、單身、たゞ妖精たちの來援だけを求めて、倒れた塔を引起し、碎けた階段を作りなほし、教皇や王後の宿つた、その昔の樓閣を建てなほした。
「この再興せられた宮殿、すなはちプロヴァンス語、農夫の息子こそ、ミストラルである。」

西曆十九世紀後半に、地中海に臨んだ南佛 Provence の一角に起つた Felibrige の運動は、當初の、プロヴァンス語を復興純化せしめ、これをもつて文學活動の具とするところから始まつて、後には政治的社會的に、パリを中心とする北部フランスに對する、廣義のプロヴァンス全體（南フランス）の地方的諸權利の主張となり、更に、國境を越えてイタリア、イスパニア（特にカタルーニャなどの地方）の同志と手を携へて、ラテン民族聯盟の形にまで發展して行つた。南部フランス一帯、更には遙に遠いブルターニュやアルザス・ロレーヌの地方に、それぞれの土地に根ざす所謂地方主義（régionalisme）の運動がさかんになつたのも、あるひはこれら諸地方が Felibrige の運動と提携したり、それに刺戟せられたりした結果であり、また、Felibrige の人々がそれらの地方に働きかけ、呼びかけた結果でもある。しかし、すべての他の場合と同じくかうした Felibrige の成果は、決してドーデーのいふ如くに——勿論ドーデーはミストラルをして代表せしめたわけであるが——ミストラル一人の手柄でもなければ、彼の一派だけのなすところでもないのであつた。

これを歴史的に見るならば、中世にあれほど榮えたプロヴァンスの文化が、北部フランスの政治的壓迫とその言語（即ち今日の標準フランス語）の南進とのために、次第に衰微し、その語は單なる俚語（patois）となり下つた十四世紀乃至十五世紀この方も、この語をもつてする文學活動がなかつたわけでは決してない。首都中心のフランス語を以てする文學に對して、それは一つの郷土藝術的な存在ではあつたにしても、各時代それぞれに若干の作家がその讀者や好事家を南佛の地に持つてゐたし、特に十九世紀初頭のロマンチズムの全盛期には、あたかもロマンチク諸家が、古典派の文學に對抗して、獨創、單素、清新を求め、民衆のために、民衆とともに仕事をするのを志とし（實行においてはともかくも）、従つて各地の地方語や方言を擁護する結果となつたために、プロヴァンスの文學も亦中央に知られることとなつた。ロマンチズムの大詩人ラマルチーヌは、後にミストラルの Mirèio を激賞することになるのであるが、その以前にも、Jean Reboul や、特に、十九世紀前半に南佛一帯に名聲の高かつた Jasmin を、最大級の言葉をもつて讚美してゐる。このやうに、中世に見事な文學の花を開かせたプロヴァンスの土壌は、その後數百年を経る間にもその養分を失はず、Felibrige の種の芽生えるに十分なだけの肥沃さを持續けてゐたのである。Felibrige の一派、特にその中の最大の名であるミストラルに、いかに大きな功績があつたにはしても、その蔭には、中世 troubadours の傳統をほそぼそながら健氣に

守つて、その燈を絶やさずこれに油を注いで來たこの先驅者たちの努力は、十分に認めてやらねばならない。

Felibrige は、1854、プロヴァンスのFont-Ségugneに集まつた七人の若い詩人たちによつて成立したのであるが、ちやうど十六世紀のla Pléiade詩派の七人の中で、他の五人にはるかに越えてロンサルとデュ・ベレーとの名が残つてゐるやうに、この七人の中で主だつたのは、ミストラルとRoumanilleと Aubanel との三人であつた。中でもこの運動の首唱者ともいふべく、その組織と下準備とに功勞のあつたのは、Roumanilleであつて、ミストラルではない。ミストラルより一年年長のAubanel はともかくも、1830生まれのミストラルに對して、ちやうど一まはり上の1818生まれであり、ミストラルの中學校時代の教師であつた（その時代に弟子ミストラルのうちに自らと同じ志を持つ天才を見出したのが、後のFelibrige運動の緒となつたことは、ミストラルの自傳Memòri e raconte第七章以來この道に著名な事柄である。）といふだけでなく、Felibrige以前の彼のプロヴァンス語文學運動に對する經驗からいつても、これは當然のことであらう。それが、一應の組織の成つたかならぬかに、合議制とはいへ、自ら長く下位に退いて若いミストラルを首領の地位に推すこととなつたのは、むろん後者の群を抜いた大才や統御の資質のためではあらうが、Roumanille 自身の謙讓の徳をもまた頌せぬわけには行かない。一方 Aubanel と Roumanille とはしばしば反目したことがあつた（例へばレオン・ドーデーの *Fantômes et vivants* 中に見る）やうだが、それがどのやうな性質のものであつたかは私にはまだよく判らない。しかしこれを別としては、彼等の仲間には心からの愛情をもつて結ばれてゐたと右のレオン・ドーデーの中にも述べてあるが、事實、ミストラルが他の六人のすべてから敬愛せられ、他の六人が此の若い首領を助けてその周圍に力を合せたことが、どのくらゐ初期のFelibrigeの運動を効果あらしめたかは、十分に味つてみてよいことと思はれる。

Frédéric (Frederi) Mistral ほど、その才と業績と人格とがよく釣合ひ、清く、高く、あたたく、健全な感じを與へる存在は、世界の文學史にも多くその比を見ない。時人はしばしば彼をゲーテに比較した。（ただし、この「プロヴァンスのゲーテ」といふやうな言方は、「東洋のマンテスター」だの、「日本アルプス」だのといふのと同じく私はあまり好まないが、プロヴァンスの人自體にとつてはどんなものか。ともかく、アルフォンスもレオンも、親子どちらのドーデーもにこの言方を引用してゐる。）プロヴァンスの meinagié即ち自作中流農の子で、Aix の法科大學を出、生涯旅行以外には故郷 Maillane の村を動かず、簡素謙虚な生活にあまんじ、Felibrigeの頭目として多面な活動をし、Mirèio (Académie françaiseの賞を得た)、Calendaù 以下かすかすの詩や散文の佳篇傑作を公けにし、プロヴァンス・フランス對譯の大辭典 *Tresor*

dou Felibrige を著し、これに對して與へられたノーベル賞金をそつくりつぎこんで、アルルの市に Museon Arlaten をしつらへてプロヴァンス郷土博物館とした。1814、郷里で永眠するまで、一意専心ただプロヴァンス再興のために捧げたその八十三年にあまる長い生涯は、まことにドーデーのいふ如く讃嘆に値するものである。しかもフランスの文學史は、彼及びその一派の文學活動がフランス語に依つたものでないために、一言半句も觸れてゐないか、事のついでにほんの少しばかり言及してゐるのを普通として來た。そのために彼の名はむしろ歐米諸外國で一層高くさへある。

ミストラルがプロヴァンス復興を念願したそもそものはじめは、中學校在學の頃であるが、その志を確立したのは、その自傳第十一章に明かなとほり、大學の業を終へて1851、八月に郷里へ歸り、父なる人から、將來の職業についてはお前の好む道を選べといはれた時のことであつた。

「その時——當時私は二十一歳であつた——足は父の家の閥にかけ、目はアルピュー連山の方に向けて、心のうちに、われから次の決意を固めた。第一には、すべての學校の、いつはりの、自然に反する教育のもとに壊滅しつつあつたプロヴァンスの種族的感情を再建し、再興すること。第二には、現在學校といふ學校が烈しい戰の相手としてゐる、この土地の本來の、昔からの言語を復古することによつて、右の復活を呼起すこと。第三には、天來の詩の流と炎とをもつて、このプロヴァンス語の盛行をはかること。」おぼろげではあつたが、懷古する今と同じく、魂の中にこの思ひが唸つてゐた。「胸をふくらますこの渦卷、このプロヴァンスの靈活の氣の沸騰に充たされ、いかなる文學上の支配や影響に對する傾きからも離れ、身に翼を與へる獨立の氣に心強く、この上妨げをなすものは何もないと確信した私は、折柄種時の季節に、歌ひながら鋤を押して行く農夫を眺めつつ、ある夕方、神助を得て、Mirèio の第一唱に手をつけたのであつた。」

若いミストラルの立てた、この三にして一、一にして三といつてよい決心、計畫に於て、その原動力をなし、本源的な要素をなしてゐたのは、ほかならぬプロヴァンス語の復古とその普及といふことであらう。これを除外しては、他の目的は成就しないはずであつた。

何故であるか。繪畫や彫刻その他の造型藝術方面、あるひは音樂（特に器樂）などに依るのであるならば、かういふ手段は不必要か、さういへないまでも限られた度合ですんだのであらうが、ミストラル等の運動は、文字に依り、言語に依るそれであつたからだ。しかも、他の方法をもつてする方がプロヴァンスの人達に對して、一層強烈な、あるひは一時的に一層鮮明な印象を與へ得ることはあつたであらうし、そのためにはその手段方法をも併用することが好ましかつたのであらうが、しかし、廣く、遠く、周到に、精密に、長期にわたつて、隔々にまでも立入つて意志表示者の心をそれを受取る者の心にしみこませ、理解させ、それに対する反應を起させるの

が言語と文字との効用である限り、この方法は、どの方法か一つを選ぶとなれば、採りうる最上のそれであつたことは申すまでもない。しかしながら、更に、この方法を以てする運動が、特にそれを受取る側のうちに、他の方法に勝つて最も好都合に働く若干の条件と、またこの方法をもつてしなければ打破出来ない障碍とを持つてゐたことを見逃してはならない。

人も知るとほり、フランス人は特に言語を尊び、會話を重んじ、説得に長ずる。フランス語はこまやかなニュアンスに富み、文法的精確さをもつて鳴る。フランス文學がかうしたフランス語とフランス人との特性に貢献することの大であつたこと、またフランス文學がこの語とこの人との特性を最も遺憾なく（善い意味にも悪い意味にも）傳へ、その特性が生みだした最も典型的な作品となつたことは今更いふまでもない。しかして、歴史的民族的にみて、北方と南方との二つのフランス人とその言語との差は極めて大きいにはしても、結局はプロヴァンス人もまたフランス人の中の一派であるかぎり、この場合の例外とはなり得ない。更に、イタリア、イスパニアなどの隣接諸國民の例をみても解る如く、南歐人は、もつと北のヨーロッパの人々に比して、著しく言語、辯説に長じ、それを重んずる。プロヴァンス人もまた、北方フランス人に比して、これが同じ國民かと思はれるくらい、一般に多辯であり、饒舌であり、多彩で華かな言語表現を好むことは、前述した父ドーデーが、その多くの著書（タルタラン・ド・タラスコンをはじめとするタラスコンもの、ニュマ・ルメスタンその他）で説く所である。自らの言葉に酔ひ、いつの間にか自分の嘘に自分が化かされてしまひ、他人もまた化かされる。南佛には一人の嘘つきもゐない、南佛人は自ら盛氣樓を作りだし、人も自らもその虜となるだけだといふ父ドーデーの戯言は、割引はして考へねばならないが、偽りと断定することは出来ない。従つて彼等に對する言語の効用（文字に表されたものは二の次としても）は絶對的であつた。

次にはフランス語（北部標準フランス語）といふものの勢力である。ミストラル自身もいふ如く、中世末期以降のフランス語のプロヴァンス浸透は、たとひ自然にまかせてゐても、フランスの中央集權の確立に伴つて、もうどうしても仕様のないものとなつてゐた上に、教育の面で學校でこの言語のみを強制せられることは、これに拍車をかけるものとなつた。プロヴァンスをもつて昔のやうにフランスに對する一聯邦乃至一獨立國としない限り——Felibrige運動は後にはそこまでも、少くとも一部では、目ざしかけ、そのためにフランス國民として非愛國的なものの悪口をも浴びたが——標準フランス語が公用語の地位を獨占することは仕方がない。しかしそのために、あらゆる點で由緒の深く、特色の強く、北部フランスよりはるかに古い文化を持つプロヴァンスの土地が、その言語の頽廢消滅とともに色も香も失つて、一樣の無味乾燥な中央化（それも至められた中央化）をかうむることは見てゐられない。（今日の東京文化、大都會文化の地方浸透と、その愚劣な模倣とを思ひ比べるがよい。）これを防ぐ第一の手段は、教育や知識

層からは除者にせられたこの土地の言葉を、復活洗練することにあつたわけである。

第三には、Felibrige の活動の少くとも最初の対象は、ほかならぬプロヴァンス人自身、すなはち Felibrige の人々の同郷人であつたといふ自明の事柄である。これが、プロヴァンスの特色を他の土地の人々に傳へようといふのなら、標準フランス語をもつてする方が比較にならないくらい好都合なことは知れてゐる。何度も引合に出す父ドーデーはパリで、「君の友人のミストラルは、なぜフランス語でものを書かないのだ。langue d'oc (南佛語) を、patois (俚語) を再興するなんて、空想だよ、夢だよ……」と何度もいはれたと記してゐるし、今日一般のフランス人や諸外國の人間が、プロヴァンスといふ土地をそのドーデーの「風車小屋だより」や「タラスコンもの」、もつと有名さは少いが Paul Arène の諸作、もつと新しくは Jean Giono の作品などで、しかもそれだけで知つてゐることが多いのも事實である。これらはいづれも、プロヴァンス出身の作家が、首都に出て、(その後郷里へ歸つた場合もあるが) フランス語でものした作物であり、その中の傑れたものである。他郷に住み、他の國の人と交はる著者が、自國の讀者と同等に、あるひはそれ以上に、他國の讀者を相手として、しばしば他郷の自然や人物との對照や比較において、自郷の事を物語るものである。自郷の風物が、他郷の人にも理解し得る程度に、多少なりとも解説的に描かれ、好奇心を呼ぶ程度にその土地の方言が點綴せられてゐるのを常とする。かういふ作品は「輸出向の品物」(Albert Thibaudet が「タルタラン」についてその文學史中にいつてゐる言葉)としていかにも恰好なものだが、それだけでなく、多少なりとも離れた地點から、廣い視野によつて郷土を見てゐるので、郷土にのみ閉居して他を知らぬ人のものに比べて、郷土とその人間とに對する觀察に公平と正當とを得てゐることも少くない。しかし一方では、以上の性質からいつて——Thibaudet の言に歸ると——あたかも職人が外國人の好みに合せて輸出向の品物を作つてゐる感じがすること、それが、潔癖な、あるひは更に固陋な郷黨人の間に、一種の不滿や反感を與へることのなしとしないのは事實である。ドーデーがタルタラン出版後のタラスコンの町での不評判を「パリ三十年」などで語り——尤もこれはドーデーの galéjade (冗談)として割引して考へる必要がある——またミストラルがその自傳の中で、プロヴァンス對ドーデーの關係を母獅子對仔獅子にたとへて、後輩の辯護をしてゐる場合などは、この極端な、また興味ある一例であらう。

そこで、郷土の人を對象とする以上は、最も純粹な郷土的感情、自らの土地を良くいふにしる悪くいふにしる純粹に郷土人の立場に立つてものを見る氣持で書かれ、いはれたものでなければ適當ではない。ところで、郷土の人は、特殊な場合のほかは、その土地の言葉でものをいふ時に最も郷土的意識が出て、自らにも他人にも強く働きかけることが出来るものであるから、プロヴァンス人としてはプロヴァンス語を用ひた場合にのみ、フランス語では到底表現出来ない郷土的

感情が表明出来、郷土の色と香とが同郷の人の胸に眞の共感を惹起することが可能になる。この故にミストラルとその一派とは、プロヴァンス語を用ひ、そのプロヴァンス語の中でも、自分たちに一番近い Maillane, Arles, Avignon 一帯の土地の言葉をもつて中心とし、これをもつてその事業完遂の道具なり武器なりとなしたのである。

彼等がこの言葉を使用したのには、もう一つほかの、一層野心的な考へがあつた。すなはち、先に挙げたミストラルのいはゆる第三の事業である。この言葉をもつて立派な文學語とすること、ダンテがトスカーナの方言を使用して「神曲」を書き、それが機縁となつてイタリア語の創造と統一とが行はれたやうに、自分たちの作物を普及させることによつて、數百年の間溝に落ちてゐた、泥だらけ滓だらけの俚語に、その本來の高い姿美しい色を返し與へ、かくしてこれを中心とする全プロヴァンス地方の言語の統一を圖ることであつた。

このやうな雄大な構想の下に、ミストラルはその同志と手を携へて出發した。初期の同志はつぎつぎに没し、あるひは遠ざかつたが、そのあとを繼ぐ人々も多く、第一にミストラル自身が健康と長壽とにめぐまれて、1814、八十四歳でこの世を去るまで、これらの人々を指導統率して倦むところがなかつたのである。

佛人東洋學者の妻であり、フランス文化一般について深い理解を持つ村松嘉津夫人は、Felibrige の運動に同情を寄せながらも、これが歴史の流に背いたものであるとして、「ミストラルの興した Felibrige の勢力は、結局消える前のランプの強い燃えあがりであつたやうだ。」といひ、ドーデーや Jean Giono は、プロヴァンス語を捨ててフランス語を用ひたからこそ、その地方主義が普遍的な影響力を持つたわけだとも述べてゐられる。（「プロヴァンス隨筆」及び雑誌「世界文學」の記事。）その村松女史は、プロヴァンスに住んで、その地の生活を自ら體驗した人である。

Felibrige の派がその集合の一中心としてゐた Ambroy 家の Timoléon Ambroy は、ミストラルと同年であり、南佛人の中でも、深慮のある、輕々しく熱狂しない方の型であつたといふが、彼はミストラルの天才を十分に認めながらも、Felibrige は全くの空想であり、明日のない主張であると考へてゐた。「死んだものは死んだものさ。この村のならはしだつて、もうわしの若い頃と同じぢやない。わしの年配の人間はもうプロヴァンス語を正しくは話さないし、Merèio や Calendaù を理解することもむづかしい……君等はいくらかでも蜃氣樓の犠牲になつてゐるのぢやないかと心配だ。」（前掲の“Fantmôes et vivants”）

また、ミストラルが、従つて Felibrige が全フランスの注目の的となつたのは、彼が獻じた Mirèio の一卷が老ラマルチースを動かし（その癖ラマルチースは原文に作者自身がつけたフラ

ンス語の對譯の方を主に讀んだらしい)、ひいて Académie française の賞を得たことに始まるのであるが——中央の文化を排撃した Felibrige にしても、それが認められるためには、まづ中央の賞讃を得なければならなかつたのは皮肉である——そのラマルチヌの一派は、この傑作の出現によつて、プロヴァンス語は Felibrige の主張に従つて統一せられ、昔日の langue d'oc の如く、全フランスを二分する勢力を持つに到るであらうと考へた。勿論、Felibrige に依る語の統一と復古とに共鳴する者は數多く、プロヴァンスを越えて全南佛に及び、各地に熱烈な同好の士を集め、イタリア、イスパニアなどにも到つたことは前述の如くである。しかし、同じ南佛の語をもつてする文學家の中にも、これに對する綴字法や語彙その他についての反對者は各地にあり、それらは Felibrige の熱心な運動の結果次第にそれに同調するやうになつたとはいへ、やはり南フランスの一帶に徹底した統一と普及とはもたらされないで今日に到つてゐる。Mirèio にしても、中央に認められたこと、特に Gounod のオペラ（むろんフランス語の詞であり、原作をかなり歪曲してある）によつて人口に膾炙することがなかつたならば、あれほどの流行を少くともプロヴァンス以外の地には生まなかつたであらう。その證據には、これに續いた Calendaù 以下のミストラルの諸作は——すべてフランス語との對譯版であつたにかかはらず——多くかへりみられなかつたのであるから。

ミストラルの郷土に近い地方の言葉を用ひたことは、それ以外のプロヴァンス各地の語や表現や、また作者がラテン語その他から作り出した更正語、新語をこれに多く附加したとはいへ、やはり他のプロヴァンス地方の人々、更にはプロヴァンス以外の南佛の人々にも理解に多少なりとも困難を感じさせ、これに對する關心を多少なりとも薄からしめたことは事實である。いはんや、「イタリア語がイスパニア語と違ふほどプロヴァンス語と異つてゐる」(Meillet) フランス語地域の人々には猶更であつた。しかもプロヴァンス語をもつて方言であり俚語であると見下す彼等にとつては、餘程の好事家でないかぎり、全文その語をもつて書かれた作物を、たとひフランス語の對譯があるにしても、讀まうとはしなかつたし、讀んだところで不完全な觀賞しかなし得なかつたであらう。(この、作者自身のつけたフランス語の對譯の仕方はまた別の問題を提供する。)

ミストラルは、公正な判斷を持ち、調和のとれたプランを作り、はるかな見通しを整然と立てた人であつたとは、彼を傳へる者の様にいふところ。ならば、それほど理性に富んだ人物が、いかに祖國復興の情熱に燃立つてゐたとはいへ、かいなでのプロヴァンス人のやうに、單に盛氣樓を描いてこれを眞實ととり違へ、敢て歴史の歩みに背いた無理な運動を起し、あるひはそれに曳きずられたのであらうか。果して彼の考へた Felibrige は、消えんとするランプの最後の燃えあがりといふだけであつたらうか。

京都に何十年と住んでも、有名な祇園祭を一度も見ただことのない人もあるし、前後數年に及ぶインドシナ滞在中に、安南料理を食べたのは、お義理にだけただ一度であつたといふ村松女史もある。關心がないか、反對の先入見があつたのでは、いくら目の前にあるものでも、その正しい姿は捕へられない。

Car cantan que per vaùtre, ô pastre e gent di mas! (おお牧人や農夫よ、君たちのためにのみわれらは歌ふが故に)とミストラルはいふ。しかしその「君たち」は全部がミストラルの作品を買つたわけではない。今日でもさうであるから、ましてその時代の「君たち」はあまり本は讀まなかつた。またその「君たち」の多くにとつては、彼の書物は特に高價で手が届かなかつたといふこともある。そのために、ミストラルの著作は書齋裡の遊戯とも考へられた。しかし第一には、いかに大衆のために歌ふものにしても、相當以上の藝術性を持つた作品ならば、ある程度の豫備知識を持ち、受入態勢をも整へなければ、味ふことが出来ないといふことも眞實である。更に、書物として讀まれるだけでなく、これは古來の傳統に従つて、口に誦せられ、語り傳へられるのが本來の建前であつたし、その意味では十分にその機能を果たしたといへる。ミストラルがその詩を口ずさむ時、旅宿の料理人はフライパンを手にしてオムレツをおろすのを忘れ、給仕は酒を客につぐのを止めて聴きほれた。やがて他の客たちも、宿のあるじも、近所の人々も、みんなが集まつて來て、一齊に唱和して、感激と昂奮との渦の卷くこと、しばしばであつたとレオン・ドーデーはいふ。卑近な例だが、大都會から流行して來た歌謡曲でもさうした情景に人々を誘ふことはあつても、更に、會津磐梯山や佐渡おけさが、それぞれの土地に惹起す同じ姿の方が一層郷土の人にその民族感情を鼓舞することにはなり得たはずである。ましてや、Felibrigeが催す時々的大小の集會に、プロヴァンスや南佛の人々がいかに熱狂して集まつたかは歴然たる記録のしめすところ。プロヴァンスを他の土地に紹介するにはフランス語をもつてするもので澤山かも知れない。プロヴァンスの人々に何十年かにわたつて、魂のふるさつを見出させるには、どうしてもこの言葉が必要であつたのだ。

この頑迷なまでの土語復興運動は、さきに述べたやうに、フランス各地に刺激を與へ、これに呼應してそれぞれの地方の權利を主張する地方主義の運動が起つた。プロヴァンスにフランス聯邦の一部としての地位を與へよといふ聲。更に一部にはもつと進んだ自治を要求する聲は、他の諸地方の聲と結んで、中央を動かした。フランス語に代へてプロヴァンス語を教育用語とすることは出来なかつたとしても、次第に中央は地方の要求に耳を貸さざるを得なくなつた。かくして、1930乃至31に出たドイツのフランス學者 Curtius の「フランス文化概論」の中にも、戦後のフランス教科書からの引用として、「フランスは地方分權化の途上にある、鞏固な中央集權の國家である。」といふ句が擧げられ、この地方分權の傾向は、フランスの相貌を一變させるには、

なほあまりに若くあまりに漠たる運動ではあるが、今日各地に地方的精力の復興が見られ、その効果が技術的経済的方面にとどまらず、知的藝術的方面にも亦あらはれてゐることが記されてゐる。かういつた地方分権化の精神を、歴史の歩みに背いたやうな、ランプの最後の燃えあがりのやうな Felibrige の努力が培ふことが大でなかつたと誰がいへようか。實際、このくらゐの強くひたむきな態度をとらなければ、フランスのやうな牢固たる中央集権國家を動かすことは全くむづかしかつたに違ひない。

しかし、フランスの地方分権には限度があつて、それは Felibrige の人々といへども大方は心得てゐたに違ひない。政治上の聯邦化や完全自治にしても、今更これが中世の昔に歸つて實現出来るものとは、彼等といへどもそこまでののはつきりした見通しを持つてはゐなかつたであらう。従つて分離主義は眞の分離主義とならず、あくまで地方の特長を活かしつつ、全體の國家に奉仕することとなる。ミストラルは結局よきフランス國民であり、Felibrige の活動は、結局フランスに貢献こそしたれ、害にはならなかつたことになる。これを裏書するものは、「私は君の村よりも私の村を、君の地方よりも私の地方を愛するが、フランスを最も愛するのだ。」といふプロヴァンス詩人の言である。

「フランスのやうな國は二つの文學を持つてよい。」この今一つのフランス文學、すなはちプロヴァンス文學は、北フランスにおいてこそ前述の理由で十分に受け入れられなかつたが、他の外國においては事情が異つた。語系を一にし、従つて最も理解せられやすい南歐諸國においてはもとより、その他の國においても、結局フランス語もプロヴァンス語もひとしく外國語であつてみれば、どちらの作品を讀まうと大した差にはならない。この故にプロヴァンス語文學は、却つて諸外國に廣く傳へられ、フランス語文學に對する關心の何分の一かには過ぎないとしても、各國にそれぞれの讀者、愛好者を持つたし、今後も持ちうるであらう。ノーベル文學賞を受けたことがその作品の價值を増すことにはよしならなくとも、ノーベルの國にまで認められたことは、ミストラルの、従つて Felibrige の外國における評價の程度を見るに十分である。

正、反、合の三段階が公理ならば、その反の部分を受持つた Felibrige の、従つてミストラルの役割はこれで明となつた。螢光燈の時代を石油ランプの時代に還すことは出来なくても、ランプはランプでまだ存在理由はある。プロヴァンス語文學も、いかに他の使命はなくなつても、立派な郷土文學として存在する權利はあるし、現状においても、それはミストラルの出現以前に比して、はるかに水準が上つてゐる。さうして、世事すべて終がある以上、かりにミストラル等の仕事完全に過去のものとなつたとしても、彼等の半世紀以上にわたる活動のあとと、その残した業績とを眺めるだけでも Felibrige の價值はあるではないか。

アメリカの雜誌 Books abroad の 1947 夏の號に Jacques Le Clercq なる人の通信になる

Oc Letters and the French Universities といふ文が載つてゐる。それに依ると、ペタン政権時代からこの方、今日まで地方主義が盛になつた一つの例として、南佛諸大學では local idiom とその文學との研究が隆昌を來したとし、Bordeaux, Toulouse, Montpellier, Aix-en-Provence の各大學における最近の業績を數多く擧げてある。中でも Aix においては、1945、四つの學位論文がプロヴァンス語について書かれ、近代プロヴァンス文學專攻の學士が二人出た。Louis Aragon は、地方の文物に對するこの熱心さを見て、これはフランスを二つに分割するかも知れぬと考へたが、それは彼の惡夢であつた。彼はあの南フランスの詩人の言を忘れたのだとして、私が先に擧げた「私は君の村よりも……」を引用してこの記事を結んでゐる。

かうした事實は、單に回顧的なものと見なさるべきであらうか。さうしてまた、此の傾向の裏にも、たとひ幾分かでも、Felibrige 運動の影響が認められないであらうか。